

# 文化

著作権問題を芸術学の立場から議論したシンポジウム  
(6月16日、京都市左京区・京都国立近代美術館)



い高生学生」はシヤルダン 技術として、銅版画は元

芸術品の著作権問題を考えるシンポジウム「藝術は誰のものか」(藝術学関連学会連立主催)のおかげで、京都市左京区の京都国立近代美術館で開催された。インターネット技術の普及で芸術の著作権の扱いが問題視されるなか、法律や表紙の面だけだけでなく、歴史的な経緯や文脈的な面から検証する狙い、議論からは、著作権の前提となる権利性の位置づけが時代や立場によって異なり、著作権制度になじみにくい芸術作品の性質が浮かんできた。

(文化情報部) 早田貴政

## 感覚と制度 異なる位置づけ

シンボでは、関連を、自身による似たような図構成や多量のメンバー、柄の複製画が多く実在する人が、絵画と音楽、映画、エディション、像の立場から問題提起。で価値の差異はほとんど、美学会の島本流、京都、ない、現時は、一点モノ、精華大、学、長、は、著作権、制度、が、確立、され、る、以前、十八、世紀のフランスの画家の意識が薄った気がする。ヤルダンの作受を節介る」と述べた。

## 芸術の著作権問題を考える

# 潮流

kyoto

## コピーとオリジナル

### あいまいな関係性

「ワールドミュージックを事例にあげた一九九〇年代、フランスやドイツのアート、ストリート、モン・パルメ、や台湾の伝統的音楽を現地録音して取り込んだ曲をヒットさせ、だが、演奏には収益が還元されていない」と指

「コピー」とオリジナルの関係性はあいまいで、一方では法律はつきりといいか悪いかを分けなくてはならない(増田聡、大阪市立大専任講師)といった感懐が聞かれた。続く議論で塚田氏は「現代社会が過剰になっ

の絵画とほぼ同等に扱われきたのに対し、十九世紀に発明されたリトグラフ(石版画)は「工業的アート」とされ、版画と隔たけられ、複製の「画題こそ、複製の考え方が生る転換の一」となったのではないかと問題を投げかけた。これは、東京音楽学長の塚田健一、広島市立大教授は、一七七〇の発音、他の出版者からは「コピー」はオリジナルに対する概念では必ずしも悪い感懐があったのでは」と話した。

があつたのだ。だが、大衆の嗜好と情報発信が可能になり、巨額の利益につながる現在では、著作権を整理していくことが避けられない。兼子氏は、インターネットや携帯用語の動画配信など動画的コンテンツ素材の需要が増えていると、ネットやデジタル技術の普及や映画会社に多くの特許や素材が埋もれていることをあげ、著作権問題を整理、解消と説明した。だが新度必要を感じた。

「以前何々の利用の立場から進められ、著作権者も多くなる。著作権関係が見えてきた。今後は、著作権問題に対して、作家や事業者が当事者の声を交えた、きこに幅広い議論が必要を感じた。

「著作権は印刷や録音といった産業的な構造から生まれ、作者の感覚から生れた」と述べた。兼子氏は「著作権は印刷や録音といった産業的な構造から生まれ、作者の感覚から生れた」と述べた。兼子氏は「著作権は印刷や録音といった産業的な構造から生まれ、作者の感覚から生れた」と述べた。